

「同じ事物」と「ありのままの現実」

田中太一

t.tanaka6002@gmail.com

キーワード： 認知言語学 同じ事物 コンテント イミ 眺望論

要旨

認知言語学では、言語表現の意味はそれが表す対象だけによって決まるのではなく、同じ事物を表しているとしても、概念化者の捉え方が異なるのなら、意味も異なると考える。捉え方の違いを示すためには、複数の捉え方に共通する事物の存在が不可欠である。捉え方と独立の事物が存在しないならば、それが捉え方であることもまた言えなくなってしまう。

本稿では、眺望論・相貌論を援用し、ありのままの現実や同じ事物の存在を擁護し、認知主義の意味論の有用性を示す。

1. はじめに

認知言語学では、言語表現の意味はその指示対象だけで決まるのではなく、その対象を概念化者がどのように捉えるのかという「捉え方 (construal)」も意味の重要な側面を担うと考える。たとえば、西村 (2018: 15) は「同じ事物を描写する複数の形式と慣習的に結びついた捉え方が互いに異なるならば、それらの形式の担う意味は対立していることになる」と述べている。能動文・受動文のペア(1)・(2)のように、真理条件的に等価である（一方が真である場合にはもう一方も真であり、一方が偽である場合にはもう一方も偽である）文は、同じ事物を表しており、客観主義の意味論からすれば同じ意味を表していることになる。しかし、認知主義の意味論においては、概念化者が事態をどのように捉えるか（何に注目するか、どの位置から把握するかなど）が異なるために、異なる意味を持つと考えるのである¹。

(1) Bill painted the door.

(西村 2018: 16)

(2) The door was painted by Bill.

(西村 2018: 16)

このような意味観はまた、「ヒトの生きる世界は「ありのまま」の現実ではなく、認知活動によって構成されたものだということである」（大堀 2002: 2）という「現実構成主義」としても

¹ 本稿では、西村・野矢 (2013) に従い、「言語表現の意味はその言語表現が指し示す対象である」という立場を客観主義（の意味論）と呼び、それに対し、「概念化者の捉え方も意味の重要な側面である」とする立場を認知主義（の意味論）と呼ぶ。

表現される。

ここで考えなければならないことは、「同じ事物」や「ありのまま」の現実のような、「捉え方」とは独立に存在すると想定されている対象の身分である。仮にそれらが概念化者の認知とは独立に存在しているとすると、概念化者に経験される世界は、概念化者によって概念化された限りの世界であるために、それらを経験することは不可能である。したがって、認知主義は概念化者の世界には存在しないはずの対象を前提とした維持し難い意味観を提示していることになってしまう。

酒井 (2013) で展開された認知言語学批判の一つは、まさにこの点に関するものである。その批判の要点は以下の引用部に端的に示されている。「現実構成主義に対するもっとも素朴でもっとも痛烈なパンチは、どうして「ヒトの生きる世界は『ありのまま』の現実ではなく、認知活動によって構成されたものだ」と分かるのか、どうして「言語が語る意味の世界は客観的な世界そのものではなく、われわれ人間の目を通した世界」だと分かるのか、と問うことだろう。人間の認識から独立した「ありのままの現実」や「客観的な世界そのもの」をいつ誰が見たと言うのか。人間の認識が届かない世界と人間の認識の内容をいつ誰が比べたと言うのか。これは明らかに不可能な企てであるように思われる」 (酒井 2013: 58)

本稿の目的は、この批判に応えることである。具体的には、「同じ事物」や「ありのままの現実」の必要性を示し、それらに適切な内実を与える。また、客観主義と認知主義の相違点を明確にするために、Sakai (2017) が論じたプレーグとラネカーの類似性についても検討する。

2. 客観主義では違うと言えても同じと言えない

野矢は、これらの文(3)~(8)²は「表現しうる事態が異なる」(西村・野矢 2013: 49) ために、客観主義でもそれぞれの意味の違いを記述することは可能であり、意味の違いを「捉え方」の違いによって説明する認知主義が、客観主義よりも優れていることを示す事例ではないと述べている³。

- | | |
|---|-------------------|
| (3) The clock is on the table. | (Sakai 2017: 265) |
| (4) The clock is sitting on the table. | (Sakai 2017: 265) |
| (5) The clock is standing on the table. | (Sakai 2017: 265) |
| (6) The clock is lying on the table. | (Sakai 2017: 265) |

² これらの例は、Sakai (2017) が、Langacker (1987: 110) が扱った(3)・(6)~(8)に Langacker (2008: 87) から(4)・(5)を加え、再構成したものである。西村・野矢 (2013: 48) において検討されたのは、(3)~(5)であり、したがって野矢自身はここにあげられた全ての例を踏まえた主張を行なっているわけではない。しかしながら、その主張がこれら全ての文に対しても有効であることは明らかであり、Sakai (2017) もまた、そのように見なして議論を展開している。そのため、本稿でも野矢は(3)~(8)は客観主義でもそれぞれ意味が異なると判断していると考えられる。

³ 野矢は、「てくる」にかんする議論 (西村・野矢 2013: 50-54) では、客観主義に対する認知主義の優位性を認めている。

- | | |
|--------------------|------------------|
| (a) 太郎が花子に話しかけた。 | (西村・野矢 2013: 50) |
| (b) 太郎が花子に話しかけてきた。 | (西村・野矢 2013: 50) |

- (7) The clock is resting on the table. (Sakai 2017: 265)
 (8) The table is supporting the clock. (Sakai 2017: 265)

Sakai (2017) は野矢の指摘に同意を示し、それぞれの文にかんして、(9)のような同値関係が成り立たないことから明らかなように、これらの文(1)~(8)は真理条件的に等価ではなく、従って意義⁴導入以前のフレーゲの枠組み、すなわち(言語表現の意味をその指示対象とみなす)客観主義であっても、認知主義と説明力は変わらないと主張する。

- (9) $\forall x \forall y (\text{be_standing_on}(x, y) \Leftrightarrow \text{be_lying_on}(x, y))$

野矢・酒井は共に、真理条件的に等価でない言語表現の差異を記述する上では、客観主義でも認知主義と等しい説明力を持っていると見なしていると言える。しかし、ある言語表現の意味を十分に捉えるためには、別の言語表現との差異だけに注目すれば十分なのだろうか。ここで見落としてならないのは、ラネカー・西村は共に、ある言語表現が「同じ事物 (same objective situation)」を表している場合であっても、「捉え方 (construal)」が異なるために意味が異なると主張しているという事実である。客観主義は、ある言語表現 A と B が真理条件的に等価である際にはそれらは同じ意味だとみなし、等価でない際には異なる意味だとみなすことになるが、認知主義は、真理条件的に等価でない場合であっても、「同じ事物」を表す場合があると考える。

議論を単純にするために、次のような例を考えたい。言語表現 A・B・C はそれぞれ真理条件として $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ を持ち、A は事態 1・2・3 を B は 2・3・4 を C は 3・4・5 を表しうる。まとめると、(10)のような三組である。客観主義であっても、A・B・C は表しうる事態がそれぞれ異なるために、異なる真理条件を持ち、それを根拠に意味が異なると主張することはできる。しかし、認知主義はそれ以上のことを明らかにする。それは、事態 1~5 の存在である。たとえば、事態 3 は A・B・C のどれもが表しうる。このことは、真理条件 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ のもとでそれぞれ捉えられる事態 3 の「コンテンツ (conceptual content)」(すなわち、同じ事物)を導入することで、初めて説明可能となる。客観主義をとるならば、事態 3 という同一の事態であっても、A によって表現すれば真理条件 α であり、B によって表現すれば真理条件 β であり、C によって表現すれば真理条件 γ であり、そこに共通であるはずの事態 3、まさに捉えているはずの事態そのものの存在にたどり着くことができない。つまり、客観主義は、私たちが言語表現によって表そうとする対象が何であるかを教えてくれないのである。

- (10) 言語表現 A 真理条件 α 表しうる事態 [1 2 3]
 言語表現 B 真理条件 β 表しうる事態 [2 3 4]
 言語表現 C 真理条件 γ 表しうる事態 [3 4 5]

⁴ 本稿では、飯田 (1987) に従い、Frege (1892) における “Sinn” に「意義」、「Bedeutung」に「イミ」という訳語を用いる。

複数の捉え方が可能である事態が存在し、どのように捉えたとしても事態そのものは同一であるというのは、私たちが言語を使用する際に前提となっている信念である。だからこそ、野矢・酒井は、客観主義の意味論を採用しながらも、同じ事物を表す言語表現であっても表しうる事態が異なると主張することが可能だったのである。しかしながら、客観主義によれば、言語表現の意味は表しうる事態の束か、あるいはその真理条件である。それゆえ、厳密に客観主義にとどまるのであれば、この前提を受け入れることはできないはずである。つまり、野矢・酒井は共に、捉え方とは独立に存在する事態（「ありのままの現実」における「同じ事物」）を前提にした議論を行っており、認知主義でなければ捉えられないはずの前提を密輸入して客観主義を擁護していることになる。

3. 含意関係は「同じ事物」の代わりにはならない

本節では、「同じ事物」の候補として含意関係を検討する。西村・野矢は(11)は(12)・(13)とは異なり時計がどのようなあり方をしているかは問わず、「時計がテーブルの上であればいい」（西村・野矢 2013: 48）という点にかんして同意している⁵。

(11) = (3) The clock is on the table. (西村・野矢 2013: 48)

(12) = (4) The clock is sitting on the table. (西村・野矢 2013: 48)

(13) = (5) The clock is standing on the table. (西村・野矢 2013: 48)

このことはたとえば真理条件を用いた客観主義によって、「X be sitting on Y」・「X be standing on Y」は共に「X be on Y」が真であるときに限り真でありうる（前者は後者の十分条件であり、後者は前者の必要条件である）というように記述することも可能だろう。一方で認知主義では、「X be on Y」と「X be sitting on Y」・「X be standing on Y」は、スキーマとインスタンスの関係にあると説明できる。

客観主義をとるにせよ、認知主義をとるにせよ、(12)・(13)に共通する意味として(11)をあげることができる。では、(12)・(13)は「同じ事物」(11)に異なる捉え方を適用した結果だと見なしてよいだろうか。もしこのように考えられるのであれば、少なくとも「同じ事物」と言われているものの一部は、含意関係によって表現することができることになる。

しかし、このような議論は成立しない。(11)は、(12)と(13)に共通する事態だけを表すのではなく、時計が上にありテーブルがその下にある事態をスキーマ的に表している（時計がテーブルの上でありさえすれば真である）のである⁶。そのため、(11)が真であっても、(12)・(13)が真

⁵ 平沢慎也氏によれば（個人談話 2018年5月）、正確には「時計がテーブルと接してさえいればいい」ようである。たとえば(11)は、テーブルの裏に時計が張り付いている場合であっても真である。ここでは、野矢・西村(2013)で行われた議論の検討という趣旨を明確にするため、「時計がテーブルの上であればいい」という前提のもとで議論を進めるが、「時計がテーブルと接してさえいればいい」と考えても議論の妥当性は損なわれない。

⁶ (11)は(12)・(13)（のいずれか）が真である場合には真であるが、同じように(a)が真である場合にも真である。
(a) = (6) The clock is lying on the table.

であるとは限らず、「同じ事物」の代わりにはならない⁷。また、(12)・(13)がともに真である事態は無数に存在しうるが、(11)では、それらの差異を捉えることができない。以上の議論から明らかのように、含意関係は「同じ事物」の代わりにはなりえない。

4. カテゴリー化について—ラネカーとフレーゲの差異—

本節では、前節までの議論を踏まえ、フレーゲの「イミ／意義」とラネカーの「コンテンツ／捉え方」の差異を明らかにする。Sakai (2017) が示したように、少なくとも固有名にかんして、「イミ」は「コンテンツ」と、「意義」は「捉え方」と対応し、両者の説明力は等しいように見える。(14)と(15)の意味の違いは、フレーゲの枠組では、明けの明星と宵の明星は「イミ」（指示対象としての金星）は同一だが、ことなる認識価値を持ち、「意義」（提示の仕方）が異なると説明される。一方で、ラネカーの枠組みでは、明けの明星と宵の明星は「コンテンツ」（指示対象としての金星）は同一だが、「捉え方」（対象をどのように捉えるか）が異なるために異なる意味を持つと説明される。ここまでであれば確かに、フレーゲとラネカーは実質的に等しい主張を行なっているようにも見える。しかし、(16)の「金星」⁸の扱いにかんしてフレーゲとラネカーははっきりと異なっている。「イミ／意義」が教えてくれるのは、あくまで指示対象とその提示方法であり、金星として捉えられることになるもの（たとえば、まさに目の前にあるそれ）が何なのかは「コンテンツ／捉え方」という枠組みによってはじめて示せることなのである。「金星」という言語記号がどの対象（イミ）をどのように提示（意義）するのかがどれだけわかったところで、目の前にあるそれが「金星」として捉えられていることが何によるのかは明らかにならない⁹。言い換えれば、フレーゲはあくまで言葉の意味の説明をしているのに対して、ラネカーは世界と概念化者の関係（とりわけその意味的側面）を包括的に説明しているのである。

(14) 明けの明星は明けの明星である。

(15) 明けの明星は宵の明星である。

(16) あそこで金星が輝いている。

フレーゲ意味論を評して、飯田 (1987: 106f) は「言葉は心の中の出来事を報告するためよりも、むしろ多くの場合、心の外の物や出来事について語るために用いられる、と。こうした観察から自然に出てくる考えは、言葉の意味が、その言葉と結び付けられている外部の事物や出

⁷ 「同じ事物」を、それぞれ(12)や(13)として捉えるのであるから、(12)・(13)が偽である場合にも真でありうる(11)は「同じ事物」の役目を果たすことはできない。

⁸ 明けの明星や宵の明星、あるいは他の固有名に置き換えても同様の議論が成り立つ。

⁹ どのような仕方であれ、言語と世界を結び付けなければ、私たちは言語による（真偽などの）判断を行うことができない。私たちが何もせずとも言語がひとりりで世界と結びつけてくれる（指示対象を提示してくれる）と考えるのは無理があるだろう。私たちが、何らかのしかたで世界と言語を結びつけているというのは否定しようなない事実である。

来事であるとする考えである。つまり、最初単なる音声や紙の上の模様でしかない記号は、世界の側に存在する物や出来事と結び付けられることによって、意味を得て言葉となるという考えである。ここで唯一重要なことは、記号と世界の側の物や出来事との間の結合が何らかの仕方で成立しているということであって、その結合がどのような仕方で成立しているかではない」という示唆的なコメントを与えている。認知文法の言葉で言えば、フレーゲが扱っている意味論は、あくまでもスキーマの水準を対象としたものであって、個々の使用状況までを射程に含んだものではないことになる¹⁰。つまり、フレーゲはスキーマの水準では認知主義をとっているが、私たちが日々経験し行なっているさまざまな具体的事例に関しては認知主義でも客観主義でもなく、そもそも分析する手段を持たないと言える¹¹。

以下では、カテゴリー化を例に、ラネカーとフレーゲの差異を検討する。カテゴリー化とは典型的には、概念化者がそれまでの経験に基づき、新たに経験した対象を、既知のスキーマの事例として位置づけることである (cf. Langacker 2008: 17)。たとえば、西村 (2018: 11) は、ある動物¹²を犬として捉えるという経験には、カテゴリー化がはたらいっていると論じている。このとき重要なのは、「ある動物」というコンテンツと「犬」という捉え方の両者が存在して初めて「ある動物を犬として見る」という経験が成立するということである。

カテゴリー化の際に使用される概念 (上記の例では「動物」・「犬」) は、(少なくともそれを表す言語記号が存在する限り) 言語記号の意味と共通の基盤を持つはずである。言語記号「犬」の意味を知っている人とは、少なくとも、ある動物を見たときにそれが「犬」かどうか判断できる人であるはずである。このとき、ある動物が「犬」かどうかを判断する基準となる犬概念と、言語記号「犬」の意味が無関係だとは到底考えられない。むしろ、両者は極めて緊密な関係にあるとみなすのが自然だろう。

カテゴリー化に代表される私たちと世界とのかかわり合いは、徹底した認知主義によって初めて説明できる。この点で、ラネカーの枠組みは、イミと意義によって言語表現の意味を説明するフレーゲの枠組みよりも優れているのである。

5. 眺望論・相貌論

眺望論・相貌論は、私たちの知覚は意識や知覚イメージのようなものではなく、世界そのものであるとする素朴实在論を擁護するために、野矢が作り上げた理論である¹³。本節の議論は

¹⁰ 少なくとも重要視していないことになる。

¹¹ 西村 (2005: 115) はフレーゲの意味論では、「話者による言語表現の理解」は無縁であり、意義の概念はもっぱらイミの概念に依拠して規定されている」と述べている。少なくとも「イミ/意義」だけでは、なぜ私たちが言語を使用できるのか、また、使用することでなにを行なっているのかを説明することはできない。

¹² もちろん、「(ある) 動物」もまたカテゴリーの一種であり、概念化者による捉え方から独立して存在するわけではない。この点に関しては、6節で眺望の無視点的把握との関係で論じる。ここでは、「犬」という捉え方に対して、相対的にコンテンツという役割を担うという程度に理解されたい。

¹³ 眺望論・相貌論は野矢 (1995) 以来継続して論じられてきた理論であり、眺望論については、野矢 (2016) においてその完成が宣言されている。

主に眺望論に関わるものであり¹⁴、次節において「無視点的な世界のレイアウト」を提示するための準備となっている。野矢 (2016: 108) は「知覚のあり方を P 、対象のあり方を o 、対象との空間的位置関係を s 、身体に関わる要因を b 、意味に関わる要因を m ¹⁵とする」と規定し、知覚¹⁶のあり方を関数(17)によって提示している。

$$(17) \quad P = f(o, s, b, m)$$

たとえば、野矢 (2016: 87-92) では、距離の知覚に関する議論が展開されている。私たちは、二羽のウグイスの鳴き声を聞いた時、一方 x が大きくもう一方 y が小さく聞こえたならば、 x は y よりも自分の近くで鳴いていると判断する（あるいは近くで鳴いているように聞こえる）。これは、 o, b, m が同一¹⁷であるときに P の差異を引き起こすのは s だけだからであり、そして私たちはそのこと（すなわち関数(17)）を了解しているからだとされる。

眺望には有視点的把握と無視点的把握が存在する。有視点的把握と無視点的把握は相互に依存しあっている。ある眺望点¹⁸からの眺望を適切に意味づけるためには、別の眺望点からの眺望のもとに把握することが不可欠である。たとえば、目の前の机は、回り込んで見ても机であり、見えていなくても裏面がある。(机の)下に潜って見上げてみても、そこには机が存在する。このような了解のもとで、初めてあるものを机として見るという経験が成立するのである。そして、複数の有視点的把握は無視点的把握を前提として初めて、比較可能な対象となるのである。このことはまた、関数(17)を了解することの内に含まれている。眺望点に依存しない対象のあり方を前提にしてこそ、眺望の差異を眺望点の差異として把握できるのである。また逆に、無視点的把握は有視点的把握に依存している。私たちの生活実践において、有視点的把握なしに無視点的把握を得ることは不可能だからである。私たちは常に何らかの眺望点に立っており（それゆえ、常にそこからの眺望が開けており）、いかなる眺望点からも無縁の地点に立つことはできない。

また、眺望点は公共的であり、ある眺望点に立てば誰であれ同じ眺望が得られる。すなわち眺望は私秘的ではない。眺望点の公共性は言語の公共性の重要な部分を担っている。

¹⁴ とはいえ、関数(17)に意味 m が含まれていることから明らかなように、眺望論と相貌論は完全に独立しているわけではない。相貌論では、知覚のあり方 P と意味 m の関係が主的に論じられる。注 15 も参照。

¹⁵ 本稿では主題的に論じることはしないが、知覚のあり方 P の内、意味 m にかんするものを相貌と呼び、それを扱うのが相貌論である。たとえば6節の(18)・(19)は、他の要因 o, s, b が等しい場合にも m が異なるために P が異なると説明される。同一の対象を同一の位置関係から同一の身体状態で見たとしても、それを何として見るかによって見えが異なるのである。関数(17)を相貌の観点から読み替えると、知覚は全て何か(相貌)としての知覚だと主張していることになる。

¹⁶ ここでは、いわゆる感覚も知覚と同様に扱われる。眺望の内とくに o, s が問題になるものが知覚的眺望であり、とくに b が問題になるものが感覚的眺望である。

¹⁷ ウグイスの鳴き声を聞くという経験において、身体の状態 b やそれがウグイスの鳴き声であること m は典型的には判断以前の前提だろう。たとえば両耳の聴力が異なる場合であれば、距離の知覚には、 s だけでなく b も考慮しなければならない。

¹⁸ 「眺望点とは対象との位置関係である」(野矢 2016: 80)

6. 無視点的な世界のレイアウト

認知主義では、客観主義では意味が等しいと考えられる(18)と(19)を、「同じ事物」を表すが「捉え方」が異なるために意味が異なるを考える。では、「同じ事物」とは、何が同じなのか、それはどこに存在するのか。この間に「概念化者による認知とは独立の「ありのままの現実」の世界において生じた事態が同じなのだ」と応えるのでは、1節で確認した酒井(2013)の批判を免れることはできない。

(18) 巨人が阪神に勝った。

(19) 阪神が巨人に負けた。

酒井が批判するような二元論に陥らず、(18)と(19)が「同じ事物」を表すということを示すのに真理条件を持ち出すのでは、その真理条件と世界のありかたをどのように照らし合わせるのかという、カテゴリー化について論じたのと同様の問題に突き当たる。そのためここでは、私たちの生活上の(とりわけ意味に関わる)実践に立ち返る必要がある。もし、(18)を真であると認める人が、同時に(19)が偽であると主張したり、(19)を真であると認める人が、同時に(18)が偽であると主張したりしたら、その人は「XがYに勝つ」・「YがXに負ける」の意味を知っているとは言えないだろう¹⁹。

ここで重要なのは、「巨人が阪神に勝った」という言語表現を用いる概念化者は、それが「阪神が巨人に負けた」という言語表現によっても表しうるということ、すなわち両者が「同じ事物」に対する複数の捉え方という関係にあると知っているということである。捉え方とは独立に事態が存在すると想定しうるのでなければ、「巨人が阪神に勝った」は「巨人が阪神に勝った」でしかなく、「阪神が巨人に負けた」とは別の事態であることになってしまう。複数の捉え方が矛盾せず両立するためには、捉え方とは独立のコンテンツ(同じ事物)が必要なのである。

捉え方とは独立のコンテンツとはいっても、概念化者の認知とは独立の世界を前提にしているわけではない。コンテンツもまた概念化者によって捉えられたものである。「犬」という捉え方に対して(それ自体もまた、別のコンテンツとの関係では捉え方でありうる)「動物」がコンテンツになるように、コンテンツと捉え方の区別は、あくまで相対的なものとして理解しなければならない。これは、無視点的把握が実際には完全な無視点ではないことと並行的である。野矢(2016:75)では、「ここ・あそこ」、「左・右」は有視点的把握とされ、「引き出しの中」、「東京都千代田区」、「東・西・南・北」は無視点的把握とされる。しかし、完全に無視点的に把握された世界に「引き出しの中」や「東京都千代田区」や「東・西・南・北」が存在しうるだろうか。たとえば、「引き出しの中」は完全に閉鎖されていない(が、通常そこに配置されるモノ

¹⁹ この了解は、あくまでも典型的な事態にかんするものであり、たとえばXとYの試合で、Yが試合に現れなかったという不戦勝・不戦敗の場合を考えてみると、「XはYに勝った」とは言えても「YはXに負けた」とは言いづらいだろう。両者を真理条件的に等価とみなす立場ではこの例を説明することは不可能だが、認知主義に立つ本稿では、ある言語表現の意味を知っているとは、他に条件を指定されなければその典型例を想定し、例外と出会った際にはその言語表現および世界にかんする知識を更新するのだと説明することができる。

にとっては、その境界を乗り越えるのは困難な)空間を容器として捉える視点がなければ適切に意味づけられないだろうし、「東京都千代田区」は現代社会に生きる人間の視点を前提にしなければ適切に意味づけることはできないだろうし、「東・西・南・北」は地球のような原点となる惑星(視点)なしには適切に意味づけられないだろう。

無視点的な把握とは、可能な有視点的把握を世界に矛盾なく位置づけたものである。野矢(2011, 2017)は、可能性には「実現可能性」と「論理的可能性」という区別があると主張する。実現可能性の総体としての空間が「行為空間」であり、論理的可能性の総体としての空間が「論理空間」である。私たちはまず行為空間のなかで、私たちにとって実現可能なことや、この世界で起こりそうなことへの構えをとりつつ生活している。論理空間はいわばその可能性を言語(概念)の力でもって延長したものである。それゆえに、無視点的(という意味を持つ)把握であっても、その内部に、私たちに想定不可能な視点までも無矛盾に位置づけることはないのである²⁰。

有視点的に把握された眺望から無視点的に把握された眺望の地図を作り上げていくことで、そしてまた、無視点的に把握された眺望に有視点的に把握された眺望を書き込んでいくことで、私たちは「眺望地図」を形成する。

眺望地図には、その基礎となる、「無視点的な世界のレイアウト」(野矢 2016: 157)が存在する。これにより、それぞれの眺望点ごとに眺望は異なるものの、「どこになにがあるか」に関しては無矛盾であることが要求される。たとえば、見間違いは、ある眺望点からの(視覚的)眺望が(他の眺望点からの眺望とは合致している)無視点的な世界のレイアウトと矛盾する経験として位置づけることができる。この、無視点的な世界のレイアウトが、「ありのままの現実」であり、そこに書き込まれる無視点的に把握された眺望が「同じ事物」なのである。

7. おわりに

本稿では、「言語表現の意味はその言語表現が指し示す対象である」という客観主義の意味論と、「概念化者の捉え方も意味の重要な側面である」という認知主義の意味論をそれぞれ検討し、言語使用において概念化者の行っていることを正確に記述するには「同じ事物」や「ありのままの現実」が必要であること、また、それらは認知主義の意味論でなければ適切に扱えないことを示した。

「イミ/意義」によるフレーゲの理論は、一見すると認知主義をとっているようにも思えるが、その内実は、いわば概念化者不在の意味論であり、世界と概念化者の関係を説明する認知主義の意味論と比べて説明力が弱い。フレーゲは心的表象(Vorstellung)を主観的であるとして意味の分析から排除するが、眺望論・相貌論に依拠すれば、心的表象は公共的な眺望として位置づけられ、フレーゲの意味論を世界と接続する可能性が開ける。

「同じ事物」や「ありのままの現実」は、私たちの生活実践から独立した世界のあり様では

²⁰ 野矢(2016: 120)では「上・下」は地球上の重力方向に対して規定されるため、無視点的な意味をもっている」という例があげられている。私たちの行為空間では、そこが地球であることは前提になっている。

なく、むしろそれを支えるものたちである。野矢 (2016: 340) において、(17)は(20)と読みかえられる。Wは「世界のあり方」である。世界とはもちろん、私たちが生きるこの世界である。

(20) $W = f(o, s, b, m)$

参考文献

- Frege, Gottlob (1892) “Über Sinn und Bedeutung” *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik* 100: 25-50. 野本和幸 (訳) 「意義と意味について」松阪陽一 (編訳) 『言語哲学重要論文集』 5-58. 東京: 春秋社. 2013 年.
- 飯田隆 (1987) 『言語哲学大全 I 論理と言語』 東京: 勁草書房.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- 西村義樹 (2018) 「認知言語学の文法研究」西村義樹 (編) 『認知文法論 I』 3-23. 東京: 大修館書店.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室』 東京: 中央公論新社.
- 西山佑司 (2005) 「表現の意味、真理条件、解釈の関係をめぐって」『哲学』 56: 113-129.
- 野矢茂樹 (1995) 『心と他者』 東京: 勁草書房.
- 野矢茂樹 (2011) 『語りえぬものを語る』 東京: 講談社.
- 野矢茂樹 (2016) 『心という難問 空間・身体・意味』 東京: 講談社.
- 野矢茂樹 (2017) 「可能性の総体としての空間について」『超域文化科学紀要』 22: 5-21.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京: 東京大学出版会.
- 酒井智宏 (2013) 「認知言語学と哲学—言語は誰の何に対する認識の反映か—」『言語研究』 144: 55-91.
- Sakai, Tomohiro (2017) On Frege's Sinn and Langacker's Construal : A Preliminary Survey of Their Compatibility. *Tokyo University Linguistic Papers* 38: 247-270.

In Defense of “the Same Situation” and “the World as it is”

TANAKA Taichi

t.tanaka6002@gmail.com

Keywords: Cognitive Linguistics, same situation, conceptual content, sense, Theory of Perspective

Abstract

Among the defining characteristics of cognitive linguistics is its conceptualist view of semantics: the meaning of a linguistic expression, rather than being determined by its referent alone, crucially involves a particular way the speaker as conceptualizer construes what he/she describes. Thus one and the same situation can be coded by multiple semantically distinct expressions that embody distinct ways of construing it. Talk of different ways of construing the same situation would make no sense if it were not for the same situation to be construed in the first place. This paper defends the existence and efficacy of “the same situation” or “the world as it is” by invoking the theories of “perspective” and “aspect” as they are proposed and supported by Noya (2011, 2016).

(たなか・たいち 東京大学大学院)